



会 議：国際海事機関（IMO）第10回船舶設備小委員会（SSE 10）

開催場所：国際海事機関（IMO：英国ロンドン）及びオンラインのハイブリッド

会議期間：2024年3月4日～3月8日

海技研からの出席者：

宮崎 恵子：国際連携センター長

黒田 貴子：流体性能評価系 耐航性能研究グループ 上席研究員

木村 新太：海洋リスク評価系 リスク解析研究グループ 主任研究員

太田 進：研究特命主管（日本船舶技術研究協会審議役）

概要：船舶設備小委員会（SSE）は、今次会合から、電気自動車や燃料電池自動車といった新しいエネルギーを用いる自動車を積載する船舶の防火要件の検討を開始し、ロードマップを策定した上で、目的指向型規則作成方法（GBS）に則って検討を進めることに合意した。さらに、GBSの目標及び考え得る機能要件を策定した。

#### 主な貢献

**黒田及び太田**は、各種救命設備規則に係る各種議題の審議を担当し、関係する作業部会（WG）にも参画し、審議に貢献した。

**木村**は、新エネルギー自動車を運送する船舶の防火関連規則の適切性の評価に係る各種議題の審議を担当し、これらの議題の作業部会（WG）にも参画し、審議に貢献した。

**宮崎**は、ISO/TC 8/SC 1 議長として ISO 代表団から参加し、情報収集を行った。



#### 主な審議結果

当所職員が担当した議題の主な審議結果は以下の通りである。他の事項及び審議結果の詳細については、他機関の報告を参照願いたい。



## 1 救命艇等の換気基準を定めるための国際救命設備規則及び試験勧告の改正

全閉囲型救命艇の換気要件に係る国際救命設備規則（LSA コード）の改正は、昨年5月の第107回海上安全委員会（MSC 107）において採択され、小委員会は今次会合において、部分閉囲型救命艇及び救命いかだの換気要件について審議したところ、こうした要件の必要性について意見が分かれ、次回会合において、次回会合に提出される各国提案に基づき、引き続き審議することに合意した。

## 2 自己復原型または天幕付き両面式救命いかだの搭載義務化の検討

小委員会は今次会合において、現在 RORO 旅客船のみに要求されている自己復原型または天幕付き両面式救命いかだを、他の船種の新造船にも要求することについて審議したところ、意見が分かれ、次回会合において引き続き審議することに合意した。

## 3 救命艇等の保守・詳細検査・作動試験等に関する要件（決議 MSC.402(96)）の改正

前回会合で設置した通信グループ（CG）は決議 MSC.402(96) の統一的な実施に必要な論点を収集した。小委員会は、これらの論点の整理を試みたが終了せず、再度 CG を設置して審議することに合意した。また、“Make” と “Type” の定義が最も重要であることに合意し、この点についても CG で審議することに合意した。

## 4 新エネルギー自動車を送る船舶の防火、火災探知及び消火装置の適切性の評価

近年、従来型自動車や新エネルギー自動車を含む車両を積んだ船舶の火災事故が増加している。特に、何千台もの自動車を積んだ大型貨物船の事故は憂慮すべきものとなっている。これを背景に、MSC 105 において次期二年計画に「新エネルギー自動車を積載する船舶の火災リスクを低減するための、車両区域、特殊分類区域及び RORO 区域における防火、検知、消火設備の適切性の評価」を入れることに合意し、SSE を関連する小委員会として指定した。前回会合では SSE 10 の議題に含めることに合意し、MSC 107 はこれを承認した。

今次会合では、防火 WG を設置して小委員会からの付託事項に基づいて、検討を進めるためのロードマップを策定し、目的指向型規則作成方法（GBS）に則って審議を進めることに合意した。さらに、GBS の目標及び考え得る機能要件を策定した。また WG では、車両区域では新燃料を使用する車両及び従来燃料の車両の双方を搭載することとなっている現状を把握し、これらの車両を搭載する車両区域、RORO 区域及び特殊分類区域に設備すべき火災安全措置に関して、火災の感知、制御（冷却）、封じ込め、及び消火に沿って議論したが、時間の制限から議論を完結することができなかつたため、ノルウェーをコーディネーターとする CG を設置して、引き続き検討を行うこととなった。

## 5 次回会合

次回の船舶設備小委員会（SSE 11）は、2025年2月24日から28日まで、ロンドンのIMO本部で開催される予定である。